



第57号

平成16年(2004)

10月20日発行

(年4回発行)

凛として—羅浮亭正江宗匠を悼む

青木秀樹

猫養会初代副会長、秋元正江さんが六月二十三日永眠された。昨年十月に長逝された東明雅先生の後を追うが如くであった。正江さんは平成六年四月に旅先でお倒れになり、鹿教湯温泉、鶴巻温泉などでのリハビリテーションを経て、十年におよぶ闘病であった。葬儀のお写真は白髪の穏やかな顔で猫を抱きになったもの、少し印象が違う感じがしたが、遺骸に接すればやはり「凛とした」正江さんであった。お通夜で同席した正江さんの小学校での同級生の方のお話で、「彼女はきれいで、頭がよく、しっかりしたお嬢さんでした」とのこと。私たちが存じ上げている正江さんの原点がそこにあった。猫養会の礎を築かれたことに感謝し、心から秋元正江さんの霊の安からんことをお祈りする次第である。

凛として蜚は西へ飛び給ふ

明雅先生をはじめすでに鬼籍に入られた先輩方と、あちらでも連句を楽しんでいただきたいと思う。

秋元正江さんは昭和五十六年四月、朝日カルチャーセンターで開講された東明雅先生の「連句・作法と鑑賞」講座の第一期生として入門。その後、連句実作指導の講師として明雅先生をサポートされ、平成三年には羅浮亭の庵号で立机された。羅浮亭とは湯島のご自宅の茶室を、古来梅の名所として名高い中国の羅山・浮山に因んで明雅先生が名づけたものという。

猫養会創立のころ、まだお若かった明雅先生は正しい蕉風の俳諧を世に広めようと腐心されていた。その先生の意欲が当時の連句界の一部の人と摩擦を生み、軋轢が有ったことは事実である。それらの人々に対して、自分の正しさを証明するために、明雅先生は自分の連句理論をマスターし、それを連句実作で実現してくれる弟子の育成を第一とした。それに応えたのが猫養会の初期メンバーであった。なかでも正江さんは先生の意を体現して、会の内外で大いに活躍された。秋元正江さんは名実ともに明雅先生の右腕であった。

私が正江さんのご指導を受けたのは電通連句会で、昭和六十二年の初懐紙から約二年間時々明雅先生の代わりに例会に来てご指導いただいた。柔らかな物言いであったが、和服

や春のセーターなど正江さんの細身のお姿からいつも凛とした雰囲気がい、さすが先生の代貸しだと感心していたものである。

『季刊連句』などで拝見する正江さんの発句は格調高く、さすが加藤楸軒門下で『寒雷』同人になられた方である。付け句は、穏やかで品がよく、滑らかな付け味を好まれ、時に応じてソフトなユーモアを交えるというもの。おほかで優雅な句風であった。

一昨年五月に猫養会の運営・発展に尽力された桃径庵式田和子さんを失い、昨年十月明雅主宰が逝去されたのに続いてこのたび秋元正江さんを失ったことは、猫養会の存亡に係わる大きな痛手である。明雅先生の意味を継いで、古い門人と新しい門人が融和して「明雅連句」、「猫養の連句」を後世に伝えて行くことが残された私たちの務めである。

そのために、先生の遺されたものを継承する東郁子様にも猫養会顧問に就くことを無理にお願いした。また、「猫養の連句」の基本を守り、連句作品の質的向上の中核となる猫養同人会に会長・副会長を置くこととし、それぞれ原田千町さん、豊田好敏さんに就任をお願いした。

今後、猫養の式目に関する疑義が生じた場合の調整や新しい宗匠の選任などで宗匠方のお力をお借りすることも含め、会員全員のお力をお借りして猫養の連句の継承を図りたいと念じている。

追悼句

羅をふはとまとひて旅立たる
 天上の句座に供へんえこの花
 面影を追ふ旅いくつ沙羅の花
 一筋の道も尽きたり沙羅の花
 清らかに星となりゆく蛍かな
 螢火のすいと流れて彼の岸へ
 短夜の夢や俱利伽羅峠越え
 泰山木の花に抱かれ逝き給ふ
 棟散るうす紫の涙かな
 沙羅の花散りしみじみと寂しかり
 追憶の月日は淡し夜半の夏
 花薔薇まとひ貴人逝かれけり
 白き薔薇才色兼備最後迄
 不忍に蓮の浮葉の浄らなる
 あやめ草小首かしげる微笑遙か
 紫陽花や一陣の風露こぼす
 大輪の紫陽花色のうつろへり
 ほうたるや逝きたる師追ひ翔つ光
 紫陽花のいのちの色に溶けゆけり
 同行の旅の記憶や海霧の中
 山青葉さやぐを供華に訣れかな

秀樹 涼しさや鹿教湯の恩師憶ふとき
 健悟 くちなしや白の静寂清らなり
 郁子 残されし詩歌の束と薔薇の束
 麻子 凜と咲き豊かに香る百合の花
 孝子 ゆるゆると新茶召しませ御寮人
 久美子 羅浮亭の明雅師の影追ふごとく
 あかり 女坂源氏螢の群れやます
 淳子 新糸を紡ぎ紡ぎて逝きたまふ
 千町 手ほどきの御恩思ふやさみだるる
 清子 梔子の香り残してこぼれけり
 淑子 美しく光りて逝きし螢かな
 達子 悲しさは夏の嵐の去った空
 志げ子 青鷺や姿凛々しく立ち尽す
 美奈子 たゆたひて花袖子の香の消えざるも
 恭子 逝かれける頃やけむれる椎の花
 守男 花菖蒲凜と色濃き一期かな
 路子 今生と云ふ幻や額の花
 政志 おおた六魚
 和代 かずかずの想ひ出秘めし藍の花 広川すみ子
 冨美 紫陽花の終のむらさき才女逝く 卯之木智子
 冬乃 初夏に逝く才こころ深かりし 渡辺 マサ

庸子 たをやかに舞ひ納めけり梅雨の蝶
 丁那 くちなしの香り纏って逝かれけり
 英子 涙の雫たまる紫陽花
 碧 語りだす少年の瞳のやさしさに
 孝子 あくがれて星となりゆく蛍かな
 千町 猫をモデルに描くスケッチ
 丁那 明月に車輛連結音響き
 健悟 くらりと来る新走りなり
 孝 早々と床をとられて秋の宿
 那 ふと嘆息を洩らす海老様
 町 大社阿吽の獅子の睨む先
 文 参院選の荒るる気配に
 悟 吹き降りの傘を斜めに広小路
 孝 彼は鮫鱈わたくしは甘鯛
 那 恋愛専科嘘とタイスを転がして
 町 夢をみてゐる螺旋階段
 文 亡き母が好みし白き薔薇と月
 孝 アルペンホルン笛遙けし
 悟 石に貌見つけて歩くおもしろさ
 那 春分過ぎて風邪の癒えたる
 文 街中の川を覆へる花筏
 悟 一輪車漕ぐ子等に陽炎
 平 平成十六年六月二十五日
 於 亀戸 麻布茶房

座談会

「秋元正江先生を偲ぶ」

今年六月二十三日に亡くなられた秋元正江先生を追悼して村田富美、倉本路子、長崎和代のお三方に先生を偲ぶ座談会を開いていただきました。真夏日の続く八月十三日、場所は高田馬場の新宿区立消費生活センターでした。

倉本 昭和四十九年四月朝日カルチャーセンターが開講され加藤楸邨俳句教室受講で初めて正江先生にお会いしました。六十名程の受講生の中で正江先生は初めから成績抜群で一人だけいち早く寒雷同人に推挙された方でした。

長崎 私はACCの生徒として出会い、正江先生は格調高く理想に燃えて、かなり厳しく、びしっと剃刀の刃のように的確に教えてくださいました。明雅先生は優しく暖かく教えて下さって、ちょうどいいバランスでした。正江先生のご病気には明雅先生もほんとにがっかりなさったと思います。

村田 平成六年四月に明雅先生御夫妻や猫糞の数人と旅行中に兵庫県三田で脳出血で倒れられたんですが、そこでアメリカ帰りの脳外科の先生の手術を受けて、幸運だったとお

聞きしていました。ACCに復帰されて車椅子で通われていた頃は、とても痛々しかったです。でも正江先生は本当に一生懸命でした。

倉本 心得なども厳しく教えて下さいました。句会では捌きを仰せつかっていたら、打越のことを考えて、場の花の句と人情の花の句を持っていきなさい。また捌きの時は、ベテランはどこでも付けられるのだから、どちらにしようかと迷うような句が出たら、初心者の句から取りなさい、とおっしゃっていました。

長崎 正江先生と会う時は必ず短冊を持っていかないとダメでした。それ以来いつも持ち歩いています。

倉本 私は昭和五十七年に胃の全剝手術後十年間闘病しまして、ようやく病癒えてACCの「連句教室」を覗いたところ、正江先生が実作指導をしていらっしゃったのに驚きました。それから教室と富美さん達の綾の会で熱心に手取り足取り指導していただきました。その状態がいつまでも続くと欲に呑み込んでいたのですが、今思えばもつと貪欲に習えばよかったです。亀戸で初めてお捌きをした時も同じ席にいて指導してくださいました。またACCの卒業作品で巻いた半歌仙が国民文化祭石川で実行委員会会長賞に入った時は、

とても喜んで下さって一日宿泊を延ばして金沢の表彰式にも付合っただけです。少し御恩返しできたかなと思いました。

新宿にどこか句座を設けたいと思いご指導をお願いしたら、とても喜んで快く引受けて下さり、お忙しい中熱心に指導して下さいました。ご自分なりの文学の香り高い連句の座を育てたいとお気持ちがあったので、ベテランは誘わず「綾の会」以外は新人を集めるようにとのご指示でした。神楽坂連句会という素敵な名前にして下さったのも正江先生です。途中で倒れられてどんなにか無念だったことと思います。

村田 明雅先生に心酔して尊敬して「先生に出会えたのは生涯の幸せだった」と言っただけでした。立机祝に明雅先生から贈られた「色も香も紫式部か小式部か」というとても素敵な句がありましたね。

長崎 お見舞いに伺った時、ゆったりしたはきやすそうなバジヤマのズボンに「明雅先生の奥様が作って下さったのよ」ととても嬉しそうにしてらしたのが印象的でした。

倉本 手術後、小康を得られた頃、ご自宅や療養先の鹿教湯温泉病院や鶴巻温泉病院へも伺って、皆で連句を巻きました。鶴巻温泉

病院で十人位でロビーで巻いた「誕生日」の巻が平成八年の国民文化祭富山の井波町長賞に選ばれましたが、とても喜んでいらっしやいました。作品を出されたのはそれが最後ではなかったでしょうか。

私は中々お見舞いに何えなかったと申訳なく思っております。十年二か月もの闘病でしたのに、全然おやつれにならず、「病みてなほ美しきひと」でした。臆たけたお別れのお顔は忘れられません。

村田 平凡社の月刊太陽に何枚もお元気な美しいお写真が載りましたね。いただいていた「文音連句作品集」今日持って来ましたが、福井隆秀さん、式田和子さん、正江先生の三人の連句作品集で皆さんお亡くなりになってしまいました。

長崎 ご自宅に伺った時、俳句の「寒雷」で巻頭選ばれた句だけの句集が今できるところという最終稿を見せて貰いましたが……。

橘 六月十七日病院に訪った時、今年の表合せは夏の発句で作りましたとお約束したばかりでした。残念です。

—お話は尽きませんが、この辺で、ご冥福を祈って終りにしたいと思います。

文責 棚町・橘

秋元正江先生のこと

浅賀丁那

平成四年四月、明雅先生のACC「連句入門」講座は土曜日に移動し、私も受講生に加えていただくことになったが、当時、秋元先生は実作を担当されて六年目、十余名のびかびかの一年生を親切に迎え入れご指導下さった。早速、初心の私たちに「会をつくっては」とご提案下さったのには驚いたが、七月には「土良の会（この名前を得たのは四回目の会のこと）」が発足した。先輩方の応援もあって第四土曜日午後の月例会は定着し、秋元先生も必ず出席されて丁寧なご指導を賜った。

さらに平成五年からは「発句」も講義に加えられ、熱心にご指導くださった。ご記憶の方も多いかと思うが、「発句を詠むには」柔軟でみずみずしい感性を保つことが必要。「俳句は自分という人間の表現です：花を詠むというのは、花の中に自分といふ人間を見ることがなのです」と俳句表現の道を折に触れ熱く語っておいでだった。それらの言葉は殊に印象深く、私の脳裡を離れない。

残念なことに、平成六年暮春、毎年楽しみに出掛けておられた花行脚の途次、兵庫県三田で脳卒中の病に倒れられ、療養とリハビリに時を費やされることとなった。一年後、車椅子での移動が大分自由になって、いったんは講座に復帰なさったが、充分な体力を回復

されるに至らず、二年足らずで講師を引退された。いつかまた復帰なさる日を夢にみていらしたことだろう。それを励みに療養をなさっていたことであろう。

しかし、平成十六年六月二十三日、不帰の人となる。

正江先生、有り難うございました。ほんとうにお疲れさまでした。どうぞやすらかにお休みください。

賦物酒恋「春炬燵」

宗匠の足のからみし春炬燵

ほつほつと聞く初鮎の酒

弥生尽汝がくり言も嬉しゅうて

赤のたすきでヨイトマケ行く

落としたるピアスを探す鎌の月

淡柿八ツ出雲八重垣

どびろくの酔ひのめぐりし嬢歌の地

これつきりよと又も口吸ふ

ワイン漬けたるヨハネの首洗ふ

十字架抱いて独り恍惚

水割をまぶに作らせちびちびり

リリハンメル之夜は短く

ニンフ舞ふ月のフィヨルド森涼し

夢の小径にちよつと止まり木

杉亭

和弥

文字

啓子

淑代

博之

正江

あかり

紀子

健悟

弘子

之

良弥

淑代

平成六年二月二六日
於 代田橋おでんや

お酒は静かに嗜まれる方だったが、酒豪も決して少なくはない上良の会の二次会にもよくお付き合ひ下さった。酔いがすこし回っておいでになると、透き通るような頬が淡いピンクに染まり、優しいお声がすこし高くなつて、ころころとお笑いになった。そんな先生とご一緒した「賦物酒恋」一巻、満尾しないままだが、ここにご披露して、在りし日のお姿を偲ぶことといたします。合掌

吾輩はマリ、当年とつて二十歳

秋元正江

吾輩は不忍池で拾われた。

全身グレイで、医者も雌と間違ふ程の美しさだった。それでマリと名づけたと主は言う。外国製の猫用ミルクをスポイトで与えられ、排泄も、湯で温めたカット綿を下腹部にあててもらい、やっと同じわつと尿が出るのだった。

ある日、雄一匹ではかわいそうだと、主は雌（名はカオリ）を手に入れ、連れ帰った。

対面は劇的だった。カオリを見ると吾輩は図らずも前脚で顔を隠してしまったのだ。かくしてわれら二匹の生活が始まったが、食事は必ずカオリに先に取らせ、吾輩はその様子を眺めているのが楽しくさえあった。主はおもしろがつてか、吾輩の方を先にさせようとカ

オリを閉め出してしまふことが間々あったが、そんな主の行動も恨めしく思われた。

カオリは何といつても両親共に血統書付きのヒマラヤン種で、自分の美貌をよく知っていた。谷崎のお琴と佐助のごとく吾輩はカオリに仕えたが、それとて厭々だったわけではなく、カオリもまたそれを当然として受けていた。

一昨年の暮、カオリは天に召された。

この猫、衰えるどころか、近頃、益々太つて顔が丸くなり、歩き方もお尻を振つてモンローウオークを続けているのに驚いた。

飼主と猫

の関係ではなくて、文字通り、家族の一員たる待遇を受けて、完全な意志の疎通があるからこそ、猫も元気に長寿を楽しんでいるのであろう。



二十韻「吾輩はマリ」

不忍池の大樹のもとに昼寝かな

蓮の花に煮干ちらばる

獣医さん雄と雌とをまちがへて

スポイトつかへ叩くやや寒

物干しの月影を踏み駆けめぐる

湯島同朋町天蓼の熟れ

旧三業地下駄屋に床屋置屋待合

野暮用ひとつ数へ日にゆく

鳥総松稲穂の簪揺らぎゐて

お琴と佐助を猫がそのまま

カオリこそ誇りも高きヒマラヤン

箱屋の兄さん帯をきうつと

江戸っ子と東京っ子とはちと違ふ

垣根をのぼる尺取の月

高齡のつれあひ二十歳意気盛ん

低頭の鼻しみじみと撫づ

パキスタン猫も人間もみな瘦せて

乳母車行く囀りの坂

あるじ今年の花見に出たつきり

おぼろとなりしバツハシヤコンヌ

一九九五年（平成七年）

猫蓑同人会会長をお引き受けして

同人会会長 原田千町

同人会会長なる大層な肩書をお受けすることになってしまった。考えればそれだけ猫蓑会に古くお世話になっているのだと改めて感慨深い。

同人会は平成3年6月発足、現在、会員はほぼ80名になるうとしている。殆どの方が朝日カルチャースクールの出と思われるが、その中で直接に明雅師の授業を受けられた方はもう少数になってしまったようだ。昭和末年頃の講義では、二弟準繩(俳諧作法書・其角・嵐雪)の虚実、自他、多少、体用、氣質から、俳諧無言抄(宗因)の去嫌、立花北枝の付方自他伝、殊に七名八体ではクラス全員次々と指され、有心付とか、向付、起情、其人、其場、観想、面影などと答えねばならず本当にどきどきしたものだ。先生の講義の中でも親句と疎句を映画のモンタージュの技法を例に説明されたのが印象が深い。連句一巻の中で序破急、恋句、侘び、寂び、しをり、を大切にされ、式目では貞享海印祿から「一句の好悪を先ず論じて、指合は後の僉議なるべし」を挙げておられた。明雅師の連句には、式目や約束事のほかの美学とでもいうべき微妙なものがありだつたようで、それが猫蓑のカラーとなり、同人は何時しかそのカラー

に染まっていく。解らないことがあれば、何時でもお伺すれば、即、お答えを頂けたものだったが、もはやそうはいかなくなつてしまつた、心細い限りではある。私を含め古い同人は、曾て教わつた事が少しずつ風化し始めているのではないかと懸念する、同人同志互いに作品を確かめ合う必要があるのかもしれない。今や私にとつては手元にある明雅師の十年間の講義プリント、文音の時のお教えその他、作品御批評の文や、折々耳に止めたお言葉が何よりの頼りなのである。明雅連句、猫蓑連句は、この先も常に連句界の正道を行く存在でなければならぬ、同人の責任は大きく常に初心に返る努力が必要なのだと思う。

猫蓑同人会の副会長を

お引き受けするにあたって

同人会副会長 豊田好敏

今年の六月に行われた「猫蓑同人会」の冒頭に、猫蓑会の青木秀樹会長に紹介されて同人会の副会長に推薦されました。事前に青木さんから耳打ちをされ、同人会の会長に推薦される方は原田千町さんだから、副会長として、よろしく願いますとのこと、私もちよつと安心して、即座にお引き受けすることに心をきめました。

同人会の「同人」の意味を辞書でひきますと、同士、同門、同好の意味となっています。まさにわれわれは東明雅先生の「同人」という、そのままであることを実感します。そして、明雅先生の「連句」を教え、後進を育てて下さっている「朝日カルチャーセンター」も健在と聞くにつき、皆さんのご努力に感謝とエールをお送りいたします。

さて、私は「猫蓑会」のお仲間以外の方と連句を巻くことは、ほとんどありません。例外は、国民文化祭に出席して、他の結社の方と一座をするくらいです。ところが、昨年正月、私が所属する「調布市テニスクラブ」の六人ほどの仲間が、「連句を教えてください」という希望を含めた要求がありまして、そこで、昨年の正月から今年の夏までに五回ほど座を持ちました。スポーツ仲間が文芸かと、私はたかをくくっていました。結構それぞれのペースで楽しらしく、今年の夏は軽井沢泊の連句テニス旅行に発展してしまいました。私の愚考するところでは、われわれ日本人は五七五と七七のフレーズは、本質的に身につけていて、感情や気持ちの表現がしやすいのではないかとおもわれます。しかし、最終的に作品にするには捌きの力量と、先生からもお教をいただいております、さらにさらに精進を積み重ね楽しみながら、作品をつくり続けたいと思う次第です。

猫養同人会作品

平成十六年六月二十日首尾

於 東郷神社和楽殿

歌仙「螢袋」 内田麻子 捌

螢袋年々ふえて灯しけり

麻子

涼しき風にゆれるカーテン

美津

古書店主雪駄を道に響かせて

良子

焙煎珈琲注ぐ名碗

暁巳

梁高き館を訪うて火の恋し

英子

鏡のやうな月の内海

良

金毘羅宮祭囃子の賑やかに

英

駕籠と競って走る若者

巳

新婚の隣の嫁さん気になって

良

楚々とした美女双児産みたり

英

将来の計算いつもあて外れ

巳

着ぶくれすれば不審訊問

英

夕月をかすめ山の端鶴渡る

津

問宮海峡越えて大陸

巳

丹田に力を込めて槍を投げ

良

JOCは金を五つと

英

豊頼の剥落仏に飛花落花

巳

糸遊燃ゆる丘古墳群

津

バーベキュー蛤焼いておしまひに

良

記念に配る千代紙の箱

英

遡る家系に何故か陰陽師

巳

昔將軍今ホームレス

津

降る縁談断つたのが運の尽

英

三十九才迷ふとしごろ

麻

なにげなき様に記されし母の恋

津

神サマよりの酒は甘口

良

湖目ざし御柱祭たけなはに

巳

ユビキタスにて探す幼児

良

とてつもない場所にきたれど月昇る

英

黄色い粉を放つ毒草

良

黍団子与へて猿を家来とす

英

するもされるもいやなりストラ

巳

運動のBGMは癒し系

良

旧正月に帰る故郷

巳

鳥ひとつ花の霞につつまれて

麻

石に座れば石の暖か

津

連衆 桑原美津 本屋良子 島村暁巳
佐古英子

歌仙「父の日や」 蒲原志げ子 捌

父の日や先づ念入りに髭手入れ

志げ子

親を待ちあまる軒の子燕

郁子

隣よりドライカレーの香り来て

憲助

受話器をとれば又も勧誘

靖子

残業の背に月影の柔らかく

碧

自転車連ね帰る夜学子

郁

ゆく秋に笠鳥ツアー企画して

碧

血圧上げる美人看護師

助

すれ違ひ改札口を西東

助

自民主の党首演説

助

ロンが逝きヤスの見送るワシントン

碧

トードムボールに至る底冷え

郁

毛衣に隠せる麻薬月見々

郁

警察犬と空港で待つ

碧

神父様すし屋大工とゴスペルを

助

キックボードで遊ぶ子供等

助

四股をふむ素人力士に花吹雪

助

目刺煙たや路地の七輪

助

春昼に木喰像の笑みたまふ

碧

丘から空へつづくこの里

碧

今はただ舞台活動ひたすらに

助

水上スキージャンプ回転

助

テロ行為ごきぶりにのみ許される

助

踏み付けられて見あげれば裾

助

乱るまま老貴婦人の自尊心

助

数へきれない恋の遍歴

助

道楽と借金芸の肥やしなり

助

モネを夢見て写生三昧

助

猫鳴きてモンマルトルの月白し

助

枯草の露しとどなる頃

助

故郷を訪へば軒端の柿すだれ

助

古き蔵より杜氏の酒唄

助

天気予報あすも全国ハレマーク

助

足取軽く僕はジョギング

助

花枝垂れ川面に届く濡るる迄

助

森に帰るか蝶の群れ飛ぶ

助

連衆 東 郁子 吉田憲助 関口靖子
松本 碧

歌仙「日露役の」 倉本路子 捌

日露役の軍隊手帳も曝しけり 路子
 裸の子らは平和満喫 實
 SFのシネマは近く封切に 嬬
 プレイクダンス路上賑はず 千恵子
 下車の駅月は私を待つてをり 利子
 ぐぐと酸漿鳴らしつつゆく 佐紀子
 秋場所の賜杯をねらふ蒙古勢 嬬
 尻の痣まで見せ合った仲 千
 幼な妻高慢ちきがかはゆくて 嬬
 だまし舟折る赤き折紙 佐
 振込めと言われてすぐに一千万 嬬
 旅の枕に木の葉髪散る 利
 月明の道を親子の北狐 實
 領土問題棚上げのまま 利
 定石の通りに打った黒と白 嬬
 通天閣で喰らふ串カツ 千
 野太き声の混る囀 嬬
^ナ馬耳東風牧師説教万愚節 千
 町内にまた作るコンビニ 實
 丸よりも三角が好き握り飯 利
 それぞれに描く父さんの顔 佐
 イラクより帰還の命ジョッキ挙げ 利
 業平忌なり生めよ殖やせよ 千
 睦言のやうに舂も愛してる 嬬
 捨てる端から溜まる切抜 同
 券売機コイン度々戻り来て 路

船頭さんはフリーターなり 嬬
 民謡の小節に月も転がりぬ 千
 腰を伸ばして障子張り終え 實
 ま、かりを分けあふ上下両隣 實
 鬼殺しよし富久娘よし 利
 マウンテンバイク箱根八里を走りぬけ 同
 ひとつ覚えの般若心経 佐
 たそがれの衣桁にかかる花衣 路
 だんだら蝶のあとに縦きゆく 佐
 連衆 梅田 實 八代 嬬 鈴木千恵子
 梅田利子 間佐紀子

歌仙「木々涼し」 長崎和代 捌

木々涼し木々の香涼し社かな 和代
 蓮の浮葉を揺らす漣 秀樹
 自費出版サインの筆も端正に 庸子
 帯の結びは軽やかにして 淳子
 弦月がこぼす音符の子守唄 洋子
 残る蛍をそっと掴みぬ 庸
 青酸橘ぎっしり並び届けられ 淳
 育ち盛りの若いタレント 樹
 礼儀より恋のノウハウすぐ覚え 庸
 「のぞみ」で時空越える逢引 洋
 いつ来ても赤福もちは売り切れで 洋

CDかけて習ふ正調 淳

ポーナスの厚さを友と見比べる 庸
 遠くの火事を照らす満月 樹
 聖蹟と言ひても今や廃墟なり 代
 大西洋を望む巡礼 樹
 眼裏の師はにこやかに花の下 庸
 春炬燵には温もりのあり 樹
^ナのどらかに猫爪立てる床柱 樹
 同じ苗字の多い村里 樹
 広げれば全紙一面サプリメント 樹
 縄文人はカルシウム好き 樹
 蝙蝠が帝の皿を飾りたり 洋
 蚊帳の向ふに振りむかぬ影 洋
 エッセイスト賞離婚してから授与される 洋
 女盛りは五十歳から 樹
 酔ふほどに熾火と糺合ひ和して 樹
 テロにまみれしアリババの国 樹
 日下レンガ砂漠にのぼる月高し 庸
 絲瓜の水を瓶に溜め置く 淳
^ナ渡り鳥旅芸人の行く所 洋
 ベンチャー企業山懐に 洋
 ウイルスがいいつも勝手に入り込む 庸
 禁煙言ひつゝ煙草売ってる 洋
 花の宴お国ことばの飛び交ひて 淳
 遅き目覚めにかぎろへる夢 代
 連衆 青木秀樹 久保田庸子 上月淳子 大島洋子

歌仙「パッチワーク」 峯田政志 捌

梅雨晴や薩摩ゆかりの神の宮

青葉に染まり上る階

色合せパッチワークで競ふらん

誰が掛けたかチェロのCD

村に来し子供歌舞伎に月昇る

松茸ごはん少しずつねと

立話すれば残り蚊ふはと飛び

いつまで続くもてるヨンさま

手鏡で閨の笑顔をつくる女

逃げてゆきそふ夢の本命

占師大吉と言ひそっぽ向き

ハワイ旅行の仮装大会

初富士を心の糧に生き抜きて

出来は如何と新海苔の月

あちこちで個人情報もれ始め

畑の隅に湧きし温泉

シヨベルカー花の扉をよけてゆく

黄金週間父とビー玉

春の磯ぼつんと置かる海女の桶

密航策動噂かしまし

祈りつつ羅漢群像の頭撫で

芸者をやめて出家隠遁

大烏瓜番の酒倒しける

急に減りたる源五郎鮎

適齢期のびて賞味期限まだ

耐震耐火まぢかねの床

理由もなく臭ひセンサー作動する
おめかし犬の集ふ公園

十五夜に吾も見送るかぐや姫

薄紅葉折り信楽の壺

秋拾母と身丈を同じくし

大浴場でストレッチする

口コミで介護用品リサイクル

年金少々暮しのんびり

ひとひらの花懐に思ふ俣

職人芸の奴胤飛ぶ

連衆 中田あかり 山田美代子

山寄一恵 花巻珠枝

日本海海戦大捷百年祭

歌仙「大戦記」

権藤和弥

捌

お水舎の敷石涼し大戦記

たくましく咲き河骨の黄

音読の宿題声を張り上げて

猫が体をすりつけて過ぐ

工場のパイプラインに掛る月

箸からやかに匂ふ新蕎麦

美術展入選なりし「円」百号

項にビリと痛きながし眼

誘はれるままに行きつく宿灯り

鞆の底の重き金塊

耳よりのネタに群がる砂の国

地べたに並べ唇売る髭

かざはなの止めばうつすら月浮かぶ

乳しほり待つ牛の行列
マーケットパソコンネットで抜けもし

釣り糸垂れる東支那海

陶人のうからやからよ花の丘

佐保姫さまはちよつと空咳

歌ひ継ぐ鉄道唱歌のどらかに

よっていきやあもこなからの酒

今様の主水をつくる博覧会

そつと押さへるペースメーカー

優勝のトリアスロン泥まみれ

髪洗ひたて香りすがやか

あま小屋は千の吐息の洩るる閨

おんぶお化けにしがみつかれて

木喰のにつこり笑まふ観世音

其処の舟和でつまむ羊羹

月今宵ひとさし舞はん君の前

翅をたたみてやすむ老蝶

ロボットがお話相手そぞろさむ

下駄をはいた子路地走り抜く

公民館着付け教室盛り上がり

町長候補白い手袋

耕せば土まろまると花に酔ふ

落語全集届く永き日

連衆 吉村あみ子 副島久美子

小池啓子 鈴木美奈子

※お水舎には元海軍経理学校正門から移された敷石が敷かれている。

今回掲載の作品につき式目についての論議がありました。

歌仙「六月の街騒」 中野昌子 捌

六月の街騒隔つ社かな 昌子
 神の白く咲ける玉砂利 千町
 なめらかに校閲のペン進めあて かりん
 猫のあくびに煙吹きかけ 泉子
 中天に桂男が笑むならん 鶴
 秋の浜にて糸垂れる人 同
 懐石膳紅葉一枚そつと載せ 千
 心遣いのほんのやさしさ 千
 メガホンのカットになほも続くキス 鳴
 辛オロンセロの甘き低音 千
 張込みの屋根裏に置く安全靴 泉
 外湯貰ひに宿の丹前 千
 最上川源流凍つる山の月 千
 DNAで臍曲がり継ぐ 泉
 年代もののジッポライター 鳴
 ナイスショットティーグラントに花満開 千
 姫蛇ひとつ腕に止まらせ 同
 青帝は民のかまどを眺めをり 泉
 すこしの酒で変はる人格 千
 精神科〇×テストばかりとか 鳴
 ニジンスキーの高き跳躍 鳴
 野にあふる向日葵描く印象派 鳴
 片陰ばかり選び行く馭者 千
 愛欲の餓鬼へこの身を施して 千
 鏡へうつる回文の刻 泉
 城砦の奥へコマンド忍び込み 千

軍事法廷物議かもしぬ 傾ける月を肴に酌み交し

追空忌には溢る下露 千
 やや寒に能の小督を謡ひをり 千
 コインで決める明日の運勢 泉
 孫達が守してくれる齢となり 千
 食後必ず歯を磨く癖 昌
 花びらは千の風吹く雲に融け 鳴
 春の鳥への遠きあくがれ 鳴

連衆 原田千町 登坂かりん 青木泉水
 井上鶴鳴

歌仙「涼しさや」 式田恭子 捌

涼しさや懐紙に透ける花模様 恭子
 集ひに嬉しけふの梅雨晴 文子
 新しきガットを張ればよく飛びて 好敏
 誰彼となく尻尾振る犬 冬乃
 赤い月萱葺屋根にぬつと出る 要子
 ワークシヨップで粟飯を炊き 乃
 古着市柄もなつかし秋のセル 文
 女坂にてひとを待つ影 同
 三つ編みがしがみついている二人乗り 要
 愛の告白聞いた気がする 文
 仰ぎ見るステンドグラス燦々と 敏

明治旧蹟呀ゆる緋月 雪下し請け負ふ爺も滑り落ち

クラスメートに坊さんと医者 乃
 いい色になつたと誉める繩のれん 文
 素焼きの甕に柄杓立て掛け 要
 花爛漫睨んでみせる御曹司 文
 麝香あげはを求め外遊 敏
 十億の購買力をねらふ春 乃
 クレッシェンドが弾けぬオルガン 敏
 小役人横向いたまま判を捺す 文
 遠き軍営砂にまみれて 乃
 筒鳥の声はぼんぼん溪を越え 敏
 午睡の夢に怪魚現はる 文
 やうやくに落籍せた芸奴白強飯 同
 ソルティードッグ口移しする 敏
 部屋中をシヤネルとワイトン埋め尽くし 乃
 求人広告擦れて破れて 同
 無声映画見終へて望む月の舟 敏
 螺旋階段降りるやや寒 文
 マロングラッセ友と分け合ふ旅のパリ 乃
 厚い新聞タブロイド版 文
 罰金も示談にするも悔しがる 敏
 老いの手習ひ上達は遅々 要
 ほのかなる花の香りを幸として 恭
 陽炎ゆるるお社の森 敏

連衆 橘 文子 豊田好敏 百武冬乃
 山本要子

文音と校合について 東明雅

連句一卷を巻き上げたら捌きが校合する。芭蕉も「やまなかしゆう」の翁直し「馬かりて」の一卷にその実体を示している。ところで文音の場合はいかがであろう。たとえば蕪村・董雨吟の文音「ももすもも」の巻では満尾まで四ヶ月の間、二人は会合したり、手紙を交換したりして十分に検討し、推敲しているから改めて校合する必要はなかったのである。

校合は用字の検討。誤字・脱字・仮名遣の誤・片仮名の打越・発句同字・同字三句去り・巻一字（春・夏・秋・冬・恋）などの字は一卷に一度しか使わないの検討から始まる。・発句には切字が必要だし、脇は発句と同時同場所が原則であり、第三は胴切を嫌い、特別な止めの形がある。これらが守られているか。

・全巻にわたって、自・他・場が打越になつていないか、また編（たとえば、自・自・場・場・他・他のような形）になつていないか、さらに内・外もたとえ、内・外・内・外というような展開はよろしくない。さらにかな止め・漢字止めがそれぞれ五句以上続かないようにする。

・月・花・恋。月花は定座にとられる必要はないが二花三月、それぞれ変化のある新しい句になつているか。恋も五句続ける時は

一続きの恋になつていないか検討する。

・一卷に地（軽み）の部分と文（丈高い）の部分の配慮がなくて単調になつていないか。校合というのは、一卷満尾した上で、捌き手が自ら添削することを云います。どのように細心に捌いても、出来上つて一卷全体を点検すると、思わぬところに差合や表現の重複を発見するもので、さらにそれだけでなく、一句一句も、それぞれ推敲することによって、より完成された作品にすることができます。

それはちようど、大工が柱を削った時、さらに磨きをかけて、小さい疵を消すようなもので、よく校合のできたものを「鉋目が取れた」などと申します。

「文台引き下ろせば即反故也」とは、土芳の「三冊子」に出ている芭蕉の語です。もとは許六の「篇突」に、「俳諧は文台上にある中とおもふべし、文台をおろすと、ふる反故と心得べし」と書かれた芭蕉の言葉に依つています。土芳はややこれを転じて用いています。その意味は連句における創作と享受の一体化、すなわち一座の張りつめた気分の中で、連衆同士、あるいは連衆と宗匠の詩魂がはげしくぶつかりあうこの白熱した創作と享受の楽しさ、それが俳諧の生命で、一卷が満尾して文台から引きおろされた懐紙は、もはや反故にひとしい無価値のものだということです。

しかし、この「座の文学」としてだけの連句がすべてかと思うと、そうばかりとも言えないので、これほど激しい言葉を吐いた芭蕉自身、決して使用済みの懐紙を反故として破つたり、棄てたりせず、筆を加えて推敲・添削し、また、その作品を弟子たちが出版することも拒もうともしませんでした。これは座を離れた一つの文学作品としても俳諧を認める立場を取っていたもので、私どもも、一座の楽しみは楽しみとして、さらに、それを校合して、よりよい作品を残すようにしている次第です。これは連句という芸術に座の性格としての特性と、書かれた文学としての性格が共存している為です。

一座している時の作者はもちろん捌きと連衆ですが、出来上がった作品を校合するのは捌きですし、出来上がった作品の作者は捌きなのです。

それ故、捌きは、作品の一句一句を添削・加筆する権限はもちろんのこと、都合によっては、句を差し替え、また作者名を変更することもできます。

月花の句主、あるいは出勝の場合、出句数の極端なアンバランスも直してよいのです。

猫養通信第四十九号及び第十二号より転載

平成十六年七月二十一日首尾
於 芭蕉記念館

歌仙「茫茫と」 中田あかり 捌

茫茫と猛暑の街のひろこれり

あかり

三十九・五度の炎昼

央子

愛用のフルート奏で酔ひしれて

良彌

携帯電話いつも留守にし

弘子

このごろはもてはやさるる小型犬

庸子

砂場に遊ぶ月と塾の子

弘子

異人さんに振り教へる踊りの輪

庸子

どうやらこれはみいでらはんみよ

彌

剃りたてのスキンヘッドのたたちよき

央子

恋のはじめはファンとアイドル

弘子

視聴率韓国映画上昇中

庸子

箸にはさめぬ絹の湯豆腐

央子

月を浴び越冬燕数へをり

庸子

ひゆるるひゆるると透る歌声

央子

念願のパリダカールを見学す

彌

オアシスの風全身に受け

庸子

着納めになるかもしれぬ花衣

央子

はこべら萌ゆる叔母の裏庭

弘子

細道を壬生念佛の練り歩き

彌

「誠」の旗がずりたなびく

庸子

利酒を重ね重ねて泥酔し

弘子

悲鳴をあぐる通風の足

央子

あの深いマロンブランド早世す

彌

永遠に変らぬ玉虫のつや

央子

羅に脆き肢体を隠しめて

弘子

内心如夜又騙しおほせる

央子

自らの真贋問はる鑑定団

弘子

埋蔵金はどこにあるやら

庸子

お頭も盗みを休む月皎皎

彌

立派な反つ歯喰ふもろこし

弘子

椎の実のひとつ落ちたりまたひとつ

央子

「賢者の石」が大ヒットする

彌

しみじみと来て隠沼に佇みぬ

庸子

白黒写真父は軍服

弘子

山深く袖も知らざる飛花落花

り

旅の便りに麗らかと書く

央子

連衆 遠藤央子 佐藤良彌 松原弘子

久保田庸子

歌仙「万緑の森」 市野沢弘子 捌

万緑の森出てどこか新しき

弘子

少年喜々と馬冷やす声

孝子

ギョラリに手捻りの碗持ちよりて

未悠

眼鏡の曇りゆっくりと拭く

實

尖塔を月通りゆく街の中

ゆみを

野分けの後の光る坂道

一恵

地芝居の紙の鑑は軽々と

同

この頃少し瘦せた姉上

孝

閨覗くクビドはいつもいたづらで

同

切って捨てたる男等の数

を

株高に景気よくなる夢託し

惠

煙草広告中吊りに増え

實

夜話の物の怪が月招くとか

孝

霜に額く円朝の墓

惠

不用品いただきままの車来る

實

町屋の土間は中庭に抜け

孝

にぎやかに三代集ふ花筵

實

陽炎踏んでをどる火男

孝

はるばると宮川越ゆる伊勢参り

を

調べ物だと革鞆提げ

孝

ジハードに迷ひは持たずその命

同

あちらこちらに動く白服

悠

帰省子の詩集借りと言訳し

惠

肩寄せ合ひし城山の雪

孝

いつの間に指輪するりと抜け落ちて

悠

氷柱ぼきりと折れし軒先

を

鯖酒に酔ひつつ友は聞き役に

孝

インサイダーで盗む情報

惠

月仰ぐわが人生のつつがなく

惠

拝み太郎は拝み伏しをり

を

冷じき古代遺跡の線描画

孝

何を食ふにもオリブ油かけ

實

ハイと会ひパイと別れる交差点

孝

小学唱歌遠く聞こゆる

惠

目つむれば眼裏にあり花吹雪

弘

群鳩翔って乗りし柔東風

實

連衆 坂本孝子 棚町未悠 梅田 實

青島ゆみを 山寄一恵

歌仙「万年橋」 松本 碧 捌

影もなく万年橋の大暑かな 久美子 碧
 路地奥しんと茄子の鉢植 冬乃
 登り窯火入れに心引き締めて 一枝
 メツシユの髪にバンダナを巻き 一
 レーシングカー瞬時によぎる丘の月 政志
 またひとしきり蠅の声 達子
 お隣は何をする人秋簾 久
 塵芥の捨て方恋の始まり 乃
 欠点も長所もまとめて全部好き 久
 こだはりし過去こだはらぬ過去 志
 カッパドキア異教徒にさえおほらかに 同
 二十メートル地下の礼拝 達
 遙々と狐分けゆく草の原 乃
 冬月のもと舫ふ川舟 枝
 肩寄せて警察手帳ちらと見せ 乃
 推理小説ちよつと読み過ぎ 久
 レイチャールズ偲ぶセツシヨン花の幕 乃
 三色卵捜す幼ら 枝
 うららかに名物校長髭を撫し 達
 銘酒の産地びたり嗅ぎ分け 志
 お土産はミンサー織の判子入れ 久
 連帯保証せぬが家訓で 枝
 はぐれしは府中祭の闇の中 乃
 異界の扉開くかわほり 乃
 古き地図海の果てには人魚生れ 乃
 ワールドツアアの三度がつかり 久
 されどわれ窓に奏づるセレナード 枝

仮にまどろむ愛しき女 久
 乱れ萩契り重ぬる細うなじ 乃
 色なき風の渡りゆく径 枝
 国体の選手壮行仰ぐ月 達
 違反駐輪貼られたる札 久
 白内障誰もかれもが若く見え 志
 シルバーパスで通ふ名画座 達
 花埋む遠き唐破風天守閣 碧
 故郷の谷訛る鶯 志

歌仙「頁繰る」 鈴木了齋 捌

頁繰るたび白南風のわたりけり 了齋
 ゆっくり昇るサイダーの泡 常義
 新型の液晶テレビかこみみて さえこ
 ちらしで作る紙の飛行機 利子
 お帰りの鐘の音を背に月の道 泉子
 夜顔開く木戸の傍ら 齋
 秋刀魚喰う男と女の物語 義
 影はんなりと三つ指をつく 利
 化粧へども行くあてのなき鏡台に 齋
 インタービューには多く答へず 泉
 垣間見る司法取引裏の裏 利
 流れ流れてどこへ流嵐 こ

連衆 副島久美子 百武冬乃 西田一枝
 峯田政志 篠原達子

寒月にフラスナー上げるアノラック 義
 今川焼にあんこたつぷり 利
 指相撲どちらが強い従兄弟どち 同
 いつか個展をめざす油絵 同
 青シート大の字に寝て花の番 利
 犬も蛙に目を借らるらし 齋
 春泥に長々続く靴の跡 泉
 ワトソン君はそこを動くな 義
 サイレンに浅き眠りを破られて こ
 痴呆はじまる父の眼の色 義
 がらくたも宝もひそむ蔵の奥 利
 座敷童子に麦茶進上 泉
 モンローのウォーク真似てフィットネス 同
 残照の中ラブレター書く 義
 説教か口説きかしかとわかりかね 齋
 しとねにそつと寝かす思ひ出 利
 ぶら下がる糸瓜長短月浴びて こ
 谷根千を手を集ふ子規の忌 義
 新走り李朝の杯に満たしをり 泉
 故郷の廁まだ外にある 利
 政治家にたかつて架けた村の橋 利
 一門統ぶる名簿改訂 利
 花不異空空不異花はらはらと散り 泉
 うつつか夢か蝶の連れ舞ふ 齋
 連衆 生田日常義 難波さえこ 梅田利子 青木泉子 こ

事務局便り

◇入賞おめでとうございます。

第十六回全国連句新庄大会

優秀賞

鈴木 了斎

「七変化」

倉本 路子

「年の暮」

川名 将義

「霧のサーカス」

青島ゆみを

「最上川」

上月 淳子

「権の花」

(新庄製作冊子記載順)

◇新人会員紹介

滝沢三実

◇猫養発展基金にご協力有難うございます。

連句インおぶせ 山寺たつみ様 八千円

丸亀連句会 今井水映様 五千円

秋元和彦様 五万円

基金の口座 みずほ銀行新宿新都心支店

普通3376045

猫養基金

◇有志による故東明雅先生の墓参

十一月十四日(日)

十時三十分より十四時

往生院にて行います。

熊本市池田一の二の五〇

TEL・FAX〇九六一三五三一四〇〇六

◇猫養会第二十四回総会議事

東郁子様顧問ご就任

平成十五年度会計報告

平成十五年度会計監査

猫養作品集十五号報告

朝日カルチャー等報告

事務局報告

深川連句会報告

猫養通信報告

青木秀樹

島村曉巳

倉本路子

梅田利子

佛測健悟

松本 碧

橘 文子

橘 文子

◇平成十七年猫養会初懐紙

日 平成十七年一月十六日(日)

時 十一時より十六時

場所 ホテルサンルート東京 芙蓉の間

TEL〇三三三七五―三二二一

猫養作品集第十五号原稿募集

ワープロによる原稿も受け付けますがB5サイズ、A4サイズのはB4に拡大して提出して下さい。

猫養会員の捌き作品 平成十六年の作品 一人

一卷 形式自由 応募用紙はB4判原稿用紙

締切 平成十六年十一月末日厳守

送り先 〒277-0051

柏市加賀二―十二―十一

TEL・FAX〇四一七二―八二一九

梅田利子

編集後記

猛暑の夏、秋暑しの九月を経て、はや明雅先生をお送りして一年目の秋十月です。

一句の止めについては、「体言止めまたは用言止めの五連続を嫌う(猫養通信第二十一号)」から「漢字止めまたはかな止めの五連続を嫌う(猫養通信四十九号)」に改められています。

作品集提出の時期でもあり、式目、校合についてご確認の参考となさって下さい。

訂正とお詫び

前号で文字の誤りがありました。ここにお詫びして訂正致します。

十三・十四頁 天明――→天保
十五頁 猫養――→猫養

季刊 『猫養通信』第五十七号

発行人 猫養会 青木秀樹

〒182-0003

東京都調布市若葉町

二―二十一―十六

編集人 橘文子 棚町未悠 林鐵男